### 田木繁『 『松ケ鼻渡しを渡る』

年午の前毫秀夫記集 『生活の声』のなかに 一者会の眼』として再編集されている。

治安維持法下の、 -四月号) 誌上で、 非合法に追込まれた共産主義運動の文学的尖兵ともいうべき、渡しを渡る』 注目をあつめた作品として、田木は 繁の「拷問を耐い

あった。

(昭和

四 年 昭 和 四

153

之 る

たために、名を知られながら流布しているものは僅少である。 年二月に日本プロレタリア作家同盟関西地方委員会出版部から出て、もちろんすぐ禁止とな に生んだ九篇の詩をあつめた空前絶後ともいうべき戦闘的なプロレタリア詩集である。 詩集『松ケ鼻渡しを渡る』は、それと同名の詩をはじめとして、田木繁がそれ以後の五年間 昭和九

に、頑強に生き残ったわずかな一人として、戦前を超えようとするほどの活力を持続する詩人 てた今日も、詩的感動を喪失しない理由であり、戦後のあわただしいファシズムからデモクラ る。いわゆる主体性の重味というものである。そのことが、戦中戦後を通じて、四十年をへだ 内部屈折が田木繁の詩ほどの圧力でその詩を内部から支えていることは他に見ない 特 長 であ け加えるなら、ファナチックな階級意識にあぐらをかきやすい政治的な左翼詩のうち、作者の あること、によってたぐいまれな力強さをもったが、それ以上に肝要な、もう一つの理由をつ しがたい。その理由は素材において階級的、 シーへの変転の下で、戦闘的に見えた左翼詩人たちが、かつての 詩根性を失ってし まった 中 たらしめているのである。 この詩集が、プロレタリア詩運動を代表するものであるということは、歴史的にすでに動 手法において現実的、それ故にいっそう戦闘的で

とするものとのたたかいの中で受けとめる彼の自己信頼(あるいは不信)の上に築かれた。否 そのリアリズムは、単に、あるものの描写や必然的信頼の中にではなく、現実を支配しよう

義国家権力の重圧にたたかいいどむ作品ばかりである。 られているのである。そのようにして、弾圧のまっただ中で産み出されたこの詩集は、 定も肯定も執拗な不信も、自己確信を通過したものだけを問題にするという頑強な態度に支え 資本主

して「拷問を耐える歌」がある。 ムにおいて、 -階級的戦闘性 他のすべての左翼系詩人にまさっているといえよう。 ーにおいて、 比肩すべきものがなく、 それに比例する芸術的ボ それを証するものと



いかお前らの手の皮と俺らの頰の皮とどちらが厚

しつぶれるか お前らの鉛筆と俺らの喉笛とどちらが先に押 お前らの鉛筆と俺らの指骨とどちらが太いか

それをはっきりと呑みこませてやろうたとどちらが堅いか

155

無表情な俺らが

それをはっきりと吞みこませてやろう いよいよおし黙る俺らが そろそろ焦り出すお前らに よいよ喚きたてるお前らに

蹴殺して水をかけ 殴り殺して水をかけ 縊り殺して水をかけ が商売の

傷をつけずに殺す術を知っているお前らに それで月給のあがる ッキリと吞みこませてやろう

呑みこませてやろう は っきりと

指先 靴裏の前に 手のひら

押しつける労働強化にたいしてのウタであった。 動させる戯詩がある。「女工小唄集― る歌」以下の詩を集めた田木繁の処女詩集『松ケ鼻渡しを渡る』には、もう一つ私を、永く感 圧服のこの法律下で、かくも凄惨なたたかいのウタは他になかったと思う。その「拷問を耐え 昭和のはじめから戦後の昭和二十年に至るまで弾圧特別法としての治安維持法、強圧な人民 俺らはプロレタリア 俺らは機械 俺らはハガネ 俺らは不死身だ 声は立てず気を失って行く俺らであることを びは洩らさずに息を吹きかえして来る俺らであることを ―リング雀は歌う」である。これは紡績女工へ会社側 との詩を、詩人田木繁の珍しい軽妙洒脱のう

などとのみ見てはならない。

うたってみせたのである。

ポーが鳴ったら一斉に横歩き

大ぜい並んで左右

上の管をさしかへて 下の管をさしかへて ちよいと糸をつまんで そら左や そら右や

糸口を見失うたら

そら下や

まくら十本のテンピキやぞ

(以下略)

,

かな賞与をエサに、 ようやく夜業廃止ときまって喜んでいる田舎出の、大根足の製糸女工たちに、工場長がわず 時間内での能率競争を強いて「会社のため、貴方がたのため」という、そ

機械の流れとこんくらべをでも昼でも横歩き

作品を書くことが出来るー 帯、にその詩は挑む。官権とたたかいながら、大工場の労働者の目ざめに働きかけ、「オルグ しなければならぬ。 は何よりもこの目標工場のある地区に住まなければならない。その工場労働者と生活を同じく との一篇をやや例外として、他の詩篇は一つにしぼられる。大阪港に臨む関西最大の工場地 かくの如くにして始めて文字通りその目標工場の中からサークルの中から ー」という。

時代を記念する。 プロレタリア詩人の実践が生んだ詩集『松ケ鼻渡しを渡る』 は、 わが昭和史の治安維持法の

#### 上村実『土塊』

争をはさんで生きのこった数人の知人と、 遺稿集は彼のたった一冊の詩集である。 れたガリ版詩集である。その前年の三月はじめのまだ寒いころ、上村は自殺した。だからこの かりである。 上村実(かみむらみのる)の『土塊』は、 今は彼を記憶するものはその日から三十五年、 押収と戦災をまぬかれた詩集を中にしての、 昭和十年十月に東京田端の詩の仲間社から発行さ 記憶ば あの戦

斜は、 として、 運動を中絶させた無政府共産党の全国的な大検挙があり、その頃から急速になった戦争への傾 彼が死んだその年の秋、ちょうど彼の詩集『土塊』が出たその月に、昭和戦前のアナキズム 上村実と彼の詩への記憶を遠ざけ、 その遺稿集の後がきに 彼と親しんだ友人たちをうしなわせた。上村の友人

一人でも、 - 僕らは上村の遺稿を追憶の意味で出版するのではない。 いばらの道を闘った彼の真情を摑んで貰えば、 それでよいのだ。いやな奴とは徹 上村の遺稿を通じて、 たった

の身辺と日本の事情の急変は、詩人上村をほとんど埋没させてしまった。 とかいた伊藤悦太郎も戦争のためにフィリッピン海域に死んだ。彼自身が死に、彼を知る人々 底的に妥協しない上村であったから……。」 いま彼は極めて少数

持ちよって発表していた『詩戦』というガリ版誌の小さなグループで、編集に当っていた清水 清が十七歳くらい、 との詩集を出した「詩の仲間社」とはその頃二十歳前後の詩愛好者たちが抒情詩や歌謡など 彼よりも十歳も年長の上村はこの仲間に加わって詩をかきはじめた。この

の人々の回想の中にだけしか生きていない。

上村實道稿集

野力があった。 野力があった。 変力があった。 変力がある。 変力があった。 変力がある。 変力がなる。 変力がなる。 変力がなる。 変力がなる。 変力がなる。 変力がなる。 変力がなる。 変力がなる。 変力がなる。 変力がな。 変力がな。 変力がなる。 変力がなる。 変力がなる。 変力がななる。 変力がななる。 変力がなななななな。 変力がなななななななななななななななななななな

十七年熊本県に生まれ、佐世保中学中退、関東詩集巻末の略年譜によれば上村実は、明治三

ズム系の労働者自治連盟に加わり、昭和七年に詩の仲間社の同人となった。 妻をうしない、そのころから自覚的にアナキズムに近づいたという。昭和五年、東京でアナキ 大震災をはさんで上京と帰郷とをくりかえし、昭和三年、郷里で恋愛結婚したが極貧のなかに

ズムに近づいたとすれば、上村の懇切な感化力もかなりのものであったといえよう。 視への異和感がプロレタリア詩を彼に書かせなかった。『詩戦』の編集者だった清水清が彼の ストの面目がある。政治的指向が文学の方針となる、いわゆる政治と文学における、文学の軽 好しながらそのマルクス主義にゆかず、アナキストの自覚をつかんだところに彼のヒューマニ 導きで目をひらき、 彼が労働組合の事務所ではたらいていたころはプロレタリア文学の全盛期である。文学を愛 詩の仲間社に集まる感傷的な年少詩人たちの幾人かが、その時期にアナキ

無口の上村にみちびかれたことは、 数年の今も無論無名詩人である。高名の人に傾きやすい年少の詩の愛好者たちが、この無名で 目には、彼の詩のある充実性となっている。その時期彼はまったく無名の詩人であり、死後十 タリア文学のもつ宣伝扇動を目ざさず、内にふかく自我意識をひそめ、それがかえって今日の 彼の詩はそのころ名を知られていたアナキスト詩人の岡本潤や植村諦などの詩とはやや異質 ずっと内攻的な性質がつよく、戦闘的だといわれるようなよそおいではなかった。プロレ 多分彼は若い彼らの集団の中で自分の生き方をためしていたのではなかったか。 彼の懇切で控え目で実践的な人柄の作用であったとおも

おれはいつまでも砂を握りつぶしたり搔きまぜたりしてみた砂の中には無数の粉砕された貝殻が混っている

人間の骨粉は混っていないだろうかと

砂

村落の藁屋根をちぎって空へ投げた!

とよりもずっと現実的だった。より積極的な詩人の仕事であった。 常任であり、 上村実が三十歳で自殺したのは昭和九年三月、失恋と生活苦のためと思われる。 年少詩人の集団をイデオロギー的に変革した活動力は、 詩壇で名を知られた人び だが労組の

遺稿詩集巻頭の「歴史」という岡本潤の序詩の冒頭には

上村実は死んだ

世俗が彼の首を絞めた

吾等の戦列は洪水のあとの棒杭のように寂しかった

そして君は、吹き荒ぶ寒風のなかを外套なしで黙々と歩き

明るく熱く、燃えあがるために恋をした……

とあった。 忘れがたい 当時のアナキスズム運動の敗退と、 その中での上村実の生き方を端的 VC 2 T

年の生活苦のゆえの前途の暗さであろう。 彼を自殺に追い込んだものは裏切った恋の相手と、 追いつめられたアナキズムの衰退と、

方がよかったと、 が批評することに、ある次元のちがいを感ずる場合もある。人に知られることなく、 表現は無論として、こういったものを撥ねかえして生き抜く強さを上村が持ちつづけることの もう一つ紹介してこの稿を終りたい。 死んで、死後友人の手で僅かばかりの部数つくられた詩集まで発禁処分にあった詩人の詩を、 それらを通してのしかかってくるものを、ひっくるめて、それを「世俗」と言っ いまも思わぬではないが、 死ぬことのできた人の行為を、生きている者たち た岡本潤 ひそかに

囚人の花

埃っぽい天井に貼り付けてあるそれを見たとき、 鉄格子の中にぶち込まれて髯だらけな囚人達の優しい瞳の上に チリ紙を小器用に弄び結び合せて慥え上げた白薔薇の花 これは本物の花よりも美しいと思った。 ああ私はその

生きたといっても、 その詩集に『土塊』と名づけたのはある一つの詩からとったということだが、 また死んだといっても、それにふさわしい命名であった。 土塊の如くに

### 世田三郎『百万人の哄笑』

冊だろう。 諷刺詩を書いた詩人は多いが、諷刺詩集と銘うったものは、 戦前では『百万人の哄笑』ただ

著者世田三郎(与太しゃべろう?)とは、 ・トクゾー (坂井徳三)である。 プロ V タリア詩人として戦前戦後に活動したサカ

『アクション』を刊行、 「広島県尾道市に生まる。早大英文科卒業。国民新聞記者となり、 左翼芸術連盟をヘてナップに加わり主に評論家として活躍した。 三好十郎・上野壮夫らと

ラブ」を設立、別名(注・世田三郎)で諷刺詩集『百万人の哄笑』(発禁)を上梓した。こ 時のきびしい検閲制度を諷し、その悩みと憤りをうたったものである。」 の詩集に収録された「伏字」は「×××」「〇〇〇」「△△△」等の伏字用記号を用いて当 プ解散後は壺井繁治・小熊秀雄・江森盛弥・野川隆らと諷刺家のグループ「サ ンチョ

166

五篇を、 場から諷刺している。 人物、時の宗教、時のジャーナリズム、財閥その他の時事的風俗に対してプロレタリア的立 「百万人の哄笑 世田三郎著(一九三六・五、時局新聞社刊) 賞金、わがペン、三井王国、東京名所、あるぞよ、人物往来の六項目に分け、時の T 08 四六版・一二八頁。収録作品

成にはげんだ後、『赤旗』日曜版の詩の選者となった。 要な事証はほぼつくされている。この著者は戦後新日本文学会に属して 『世界現代詩辞典』の、坂井徳三と『百万人の哄笑』につい ての記述によって、この詩集に必 『サークル文学』の

とめ得る詩人はめったに出てこない。これからも容易に出てくるとは思えない。 現するために書かれる文学であるだけに、ウイットに富む現実批判の力を要すること が大き 『百万人の哄笑』は、まず第一に詩史的な稀少価値を認められねばならない。 諷刺が、正面から対決するものではなく、暗に、ひそかに、しかし怒りと憎しみと軽蔑を表 また持続的な力であらねばならない。たとえばこの詩集『百万人の哄笑』ほどに作品をま だか

### この詩集の後記の

ころ、 のであった。総じて新聞の政治漫画的ではあったが、次の作品「百万人の哄笑」などは成功し のつよいものであった。いうなれば、プロレタリア詩の目的と同じ立場をはっきりと示したも あり、十分成功とはいかなかったが、その中の一人として、世田三郎の諷刺詩は、 詩が書かれようとしたことは、戦争への近づきとそのための暗い時代の到来を思わせる。その り、川柳となった歴史をふりかえって、戦前昭和十年ごろ、左翼詩人たちの手で積極的に諷刺 されていた、そのような時代のあったことを物語る言葉である。庶民のうっぷんが落首とな と言うのは、左翼文学が追いつめられて、諷刺だけが彼らの意見表明の方法としてわずかに残 して、いろいろの議論が行われているが我々は、ともかく、大いに書こうとおもっている」 「諷刺詩が勃興し、諷刺詩を書く仲間がたくさんできて来た。 積極的に諷刺詩をかくことにつとめた詩人として、 の一つであった。 壺井繁治、小熊秀雄、 現在、この形態の作品 江森盛弥等が 政治的色彩

ハッハハハハ

狐が、ハハ

一番偉い狐が、ハ

フロック着こん

縞のズボンで階段をのぼる

一つ、二つ、三つ……五つ

高みで皆をチョット見降して読んだよ、訓旨を

誰も、誰ァれも、人間の聞いていない訓旨を。

同じ姿のちょっと偉い狐が

狐が

頭をさげて聞いた

国中のものの誰も聞いてい ない訓旨を

(百万人の哄笑)

悟しなければならなかったのが当時の日本である。 これでは諷刺が行きすぎて目的を逸する これでは直喩にすぎる。 ことにもなる。諷刺が、あてこすりにまで下落しやすいことが、諷刺文学のむずかしさだが、 この情景を彼らのいうブルジョア議会とその開院式のことだとすれば、当然、発売禁止を覚 諷刺とは、 吹き来る風に向って帆を張るようなもので、 吹き流されつ

代表作であろう。 つ、目的に近づいてゆくものでなければならない。 そんな意味で「伏字」という詩はこの中の

×「何だと? おれは『××』だ」 うん、そうか

○「『××』? そんな名前はない。だが、 おれは『〇〇〇』だ」 それでいいなら、おれも明かせる。

×「『〇〇〇』? そうか。それじゃ、

わかった。おまえと、おれとで

『××○○○』だ、わかったか」………(略)

(伏字)

があり、まず成功した諷刺詩であった。 れた。それを逆手にとり、しかもこの詩には、 思想や文学にたいする弾圧のために、 弾圧の手をはぐらかして笑殺する巧みさと鋭さ 文書の××や〇〇(伏字)が、やたらに用いら

当時こんな詩集は、ほとんど発禁を覚悟の刊行ではなかったかと思われる。

# 松田解子『辛抱づよい者へ』

がそういっている松田解子の詩集 的自覚と、たたかう思いのはげしさがその狙いだ。 り坑内ではたらく娘をうたっていながら、それは娘をうたったというよりも、 「この詩の後半が忌諱にふれたのですが、今でもつよい愛着を感じています……」と今も著者 『辛抱づよいものへ』 のはじめの詩「坑内の娘」は、 坑内娘の、 文字通

奈落に導く堅坑も恐れはしない。
な達は連搬婦、私達は坑内の娘だ私達は連搬婦、私達は坑内の娘だ私達は連搬婦、私達は坑内の娘だ私達は連搬婦、私達は坑内の娘だ

といったはげしいうたい出しの詩である。 か の『女工哀史』 0 つまり大正の糸取娘たちの

たちもいたということである。 総体的な弱々しさにくらべて、 昭和のはじめには坑内で働くのだとはいえ、 このように 強 Vi

命をもったということである。 を考えると「坑内の娘」というこの詩は、プロレタリア文学作品のなかでも注目されてい 売を禁止され、昭和十年には詩集『辛抱づよい者へ』がこの詩のために発禁になっていること この詩が発表された昭和三年十月号の雑誌 『戦旗』 は この詩のためのみではあるま V い運 为言

削除されるに値いする、 は、あたらしいテーマも情熱も、 こんで成功したが、詩のボルシェヴィキ化などという指導方針のままにそれが繰りかえされて だが。)いいかえれば、昭和の初めにプロレタリア詩はあたらしいテーマに革命的情熱をぶち 詩のテーマの幅がせまく、働く者の人間的に豊かな感情をではなく、作者の左翼的な主観で押 遠慮なく語らせるという、素朴な手法に終始し得たことであり、短所も亦、だから必然的に、 あると思う。長所とは、生産場面に働く者の姿を描き、その者たちに作者の意欲するところを しまくるというところから生じている。 リア詩人の、 松田解子は、昭和のプロレタリア詩の長所も、また短所も、遺憾なく発揮した詩人の一人で いくつかの詩篇が記憶されているわけだが、「坑内の娘」も当時この詩集から 女らしくない 刺激を弱くして痩せてくる。 (いや、 (その左翼的主観が強度に自我のものであればいいの 女ならではの)はげしい息吹きをもっていた。 わずかに現在では数人のプロレ

たであった。 坑内の岩塊の下で、 むしられ、 ちぎれて死んだ友だちを見ても「泣けなかった私」の怒りのう

進まなければならない。 私達は其の死骸を踏み越えて 私達は其の死骸を踏み越えて

(中略)

けれども私達は泣いてはいけないけれども私達は泣いてはいけない。今日も真直ぐに進まなければならない。此のガスランプで何も彼も照らして見よう。監督の猛獣の様な眼が

そして私達の最初の闘いを宣する日を創ろう。 私達は手を、握ろう。 ケージの中、鉱車の蔭で、 お互いに結び付とう。

私達は、今日、鉱石を掘出す。 だが、その日には 打ち砕かねばならないかを するないかを

という、一九六○年代の若者なら別の意味に受けとりそうな文句もその当時の検閲は、非合法 あろう。だから忌諱にふれそこの部分の削除を余儀なくされてしまったのであろう。 組織への執念の高まりと見たにちがいない。この詩はそうしたうたとして読者の共感も得たで という歌ごえは喜びも悲しみも地下足袋で踏みこえてという。この「ケージの中、鉱車の陰で」

## 手塚武『一社会人の横断面』

やかに語る。 詩集『一社会人の横断面』の著者手塚武は、近ごろ、自分についてのメモを次のようにおだ

「私は最初アララギより象徴派にあこがれ、 生活的なものの中に抒情性をもった詩を指向し

には中西悟堂や吉田一穂らに近く、ヨネ・ノグチには可愛がられた……」 た。室生犀星を好んだが、そのナイーヴなあたたかさ、感覚的な鋭さを尊敬した。この詩集の 『解纜』にしようと思った。 当時の私は "銅鑼』の原理充雄、 黄瀛と親しく、 個人的

ぬものが感じられる。 しかし、こう語られたことと彼の発禁詩集『一社会人の横断面』の中味には、 微妙にそぐわ

で、その詩的バイタリティが注目された。坂本遼、原理充雄、黄瀛、神谷暢、土方定一、森佐 詩人が多く集まっていた。ガリ版活版こもごもの、 人で『銅鑼』の編集を担当した時期もあった。 一らがおり、猪狩満直、宮沢賢治らも同人に名を列ね、 この詩集は昭和三年に"ドラ・パンフレット第三』として出された。ドラすなわち『銅鑼』 大正十四年四月から昭和三年六月までに十六冊でた同人誌で、そのころはアナキズム系の 草野心平が中心となったユニークな存在 手塚武はこの仲間の有力な働き手の一

烈に述べ、次号で赤木健介が反論する場面もあった。つまりかつての手塚武には積極的な思想 われの求むる所は、かれらマルキシストの将来しようとする『それ』以外のものである」と痛 エッセイを書いて「ボルシェヴィキ革命が成功したか、失敗に終ったか、その論議は時期尚早 大正十五年にその手塚武が、同誌の第八号に「新しい盗人」というソビエト・ロ る。そとには新しい封建主義が樹立された。 依然として厳然たる権力主体がある シア批判の

詩人といった俤もあった。

礎とした社会の政治的表現は、 言葉が書かれている。この詩集の禁止にはこういうところが理由だったかもしれない 及びその諸団体の自由なる連合に求めねばならぬ」という、アナキズム理論を要約したような 詩集の扉には素朴な一個の鎌の絵があり、その裏には の社会に至っては、この歴史上の新たなる経済現象と調和する新組織を、 之を議会政治に見る。然れども共同の資産を共同の手に恢復せ 「賃銀制度と資本家の民衆掠奪とを基 自由なる団体

を望む抒情でなければならない うものである。 みることによって、わが国の詩人の戦争による巨大な崩壊または転身の様相がつかまれるとい 事変から同二十年までの戦争の期間 以上に紹介した手塚武の、二つの側面がそれぞれに再認識されるその中間に、 しかし詩人としての手塚武を語るものは、 (彼はこの間に詩人としての活動を停止した)を置いて この発禁詩集の前後における、 昭和六年の満

僕をいとしむ眼

床 母

ない。

の僅少は、文学にかかわる生活者としては寂しくないことはないとも、

言っていえないことは

れるに値したことは詩人の幸福がそこにあったとも言えるし、しかしその行為のボリューム

輩出し、興亡したことがあった、という教訓は重い。 は、そのような時期を語るものの一つとして在る。

大正の末から昭和のはじめ、

一九二〇年から一九三〇年ごろにかけて、

手塚武のこの詩集の発売禁止ということ

ヒューマンな詩人が

僕をかなしむ眼

母

地平につづく平行線

さようなら

僕は行く……

愛する人よ、

行為! 闘争!

行為の中に!

177

176

死にものぐるいほどの行為であったことを示している。 「行く」ということがこのように詩にうたわれたようなその時期には、「行く」ということが、 その単純なことが、情熱をこめて書か